

ἀλληγορέω

アレーゴレオー

知っておきたいキリスト教のことば (62)

寓喩 ぐうゆ

聖書の会の中で、このような会話がありました。「イエス様、もう少しわたしたちにわかるように話してくれたらよかったのに」。

聖書にはイザヤ書 5 章 1～7 節の預言やダニエル書 7 章の黙示文書など、表向きにはある物語を伝えながら、その奥に別の意味を隠して書かれた箇所があります。そのような書き方を「寓喩」と呼びます。

イエス様のたとえ話も、しばしば寓喩とみなされて解釈されてきました。その解釈を「寓喩的解釈」といいます。たとえばアウグスティヌスは「よきサマリア人のたとえ(ルカ 10:30～37)」について、「エルサレムからエリコに下っていったある人」を「アダム自身」、「エリコ」を「月、すなわち我々の死すべき性質」、また「着物をはぎ取る行為」を「その人の不死性をはぎ取ること」と解釈します。さらに「サマリア人」は「イエス・キリスト自身」、「オリーブ油を注ぐ」は「よき望みを与えて慰めること」、「宿屋」は「教会」、「宿屋の主人」は「使徒」というように解釈していきました。

現在はこのような解釈だけでは、たとえ話の本質をきちんと理解できないと考えられています。しかしイエス様のたとえ話は福音書が書かれた頃には、すでに様々な解釈がなされたようです。

イエス様のたとえの中に「種を蒔く人のたとえ(マルコ 4:1～9)」というものがありますが、このたとえを説明しているマルコ 4:13～20 はイエス様の言葉ではなく、福音書が書かれる前に原始キリスト教団がおこなっていた解釈であるという見方が一般的なものとなっています。

聖書の言葉をわかりやすく知りたいという思いは、今も昔も変わらないのでしょう。

次回は「苦難」です。お楽しみに。



「種まく人」

ジャン＝フランソワ・ミレー

1814～1875 年

これには、別の意味が隠されています。すなわち、この二人の女とは二つの契約を表しています。子を奴隷の身分に産む方は、シナイ山に由来する契約を表していて、これがハガルです。

(ガラテヤの信徒への手紙 4 章 24 節)

